

一風流、清楚も一雅趣のみ、瀧と云へば、直ちに豪放の姿を想起するは、自然の數にして、真趣の在る所なるも、瀟洒優雅、自然其の名の由來する所にして、其の姿の表する所、此の瀧の如きは、強ち、罪を作者にのみ歸すべからざらんも、少くも、名に泥みて瀧の真趣を閑却したる迹は、歴々徴すべきにあらずや。題に泥みて瀧の眞を忘れさらんは、見ん人の注意なるべきなり。況んや之れ等の國風、彼の

日照香爐生紫烟

遙看瀑布掛長川

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天

と曰へるものに比すれば、雄大跌宕、寧ろ之に存して、着想亦遂に此の一絶の外に逸する能はず。其の稍々趣を異にせるものも、纔かに、織折を競ひて氣魄に乏しきは、大に察すべき所ならずや

國風源流二千年の昔に比して、今に至る迄、遂に甚だしき進歩革新を見る能はざるは、泥つ所在にわらざるか。否か。

(完)

金の亞米利加

亞米利加人は全体虫歯の多い人間なので有名で、従つて亞米利加と云ふ國は齒科醫術の發達して居るので有名だが、此國で毎年天國へ昇る人が其遺骸と共に地下に遺して行く入齒金の總額は實に大したもので、其額は無慮百萬圓に達するそうだが、そこで或人の統計によると斯う云ふ風にして三世祖も續いたなら地下に埋れる人齒の金が總計二億八千六百萬圓となり、即ち現時合衆國に流通する總金額に相當するだけの巨額に昇るそうだ。

松川浦に遊ぶ

小林雨峰

予の東奥に遊ぶとこゝに三たび、遊ぶごとに何事をかものす、この稿數年前草せしもの今年また此のあたりに至れるも遂に松川浦に遊ぶず、されども曾つて見し、浦曲の景色思ひ出されて

神往々堪へず、紀行の一節を抄す。

八月八日、此の頃の涼氣朝夕頓に催し來れるは、流石に初秋の時候を迎へたる爲にや、蛸蟬未だ老ひたるを見るなきに、この涼冷を迎ふ、造化の人間を弄するとの奇なるを啣ち、友どち連れだちて中村町（磐城）を去る一里餘りなる勝地松川浦に遊ぶ、快適の情、未だ行かざるに既に胸宇に溢る蘆堂、痴仙と後になり、前になり下松と云へる處より、一隻の小舟を倩ふてゆく、淺水猶ほ棹すに便ならず、捲藻草艫を纏ふて更らにゆき易らず、漸く進めば雲脚雨を催し來りて、鳴神さえおどろくしく遠く響く、遙かに雲間の彼方を仰げば峯巒重なり合ふて、突兀蜿蜒翠巒淡く飛ぶ、雨雲やとぎれととなりて、東方の灣水廣く漲り來れり、小舟を離れて陸地上れば、細徑の傍には蠣

殻堆く、そこへと積まる。洞門の如き形なせる岩屋あり。何にやあらんと窺ふに、これは鹽焚き竈のそれと知らる、鹽槽立ち並び、中には今鹽焚きかゝりて、煙さえ蓬々として薄らけく舞ひ上るすら見ゆ、

わはれ蟹戸濫丁の生活、藻鹽焚きつゝ、其日くを送りゆく、此處に幾何の恩賚ありと世の人は知るや知らずや、五六軒斗りなる浦曲に臨みて立てる家々の子供等の、吾等の風を見ては目を峙てつ打ち見やる様のいかにも哀れにも覺えつ、徑路の盡くる處に到れば、懸崖を削りて石磴あり、軽く歩を運びて躋るに、上に小やかなる拜殿あり、夕顔觀音と題せり、この觀音昔時瓢に乗りて漂泊したるものなりとか。風雅なる觀音もあるものかな、なぞと獨語しつゝうち拜みぬ、

崖がけの前面ぜんめんには小松懸こまつかけれり、眼下がんげ幾いく十尺じゅうしやく、灣水わんすい深ふかく浸ひたりて深碧しんせき渦うず巻まけるところ、これ海うみに太平洋たいへいようの潮うしほにぞある、崖がけに傍そばふて風雨ふううに曝さらされたる、鼻缺びながけ地藏ぢざうの正体しやうたいも鹽風しんぷうの爲ためめにや落凹おちぼみて、臙げろに化地藏ばぢざうとなり果はてける様さまの如何いかにもわはれなる、石佛いしほとけのミールと云いは、大方おほかたは推おししられん、岩蟹いはかにのちよこくと匂ほひ出いづるを、興きようがりてさては堂後だうごに攀よち上のぼりぬ、三人巖角さんにんがんかくに踞まして腰こしを熨おし、遙はるかに東北とうほくの方かたを見渡みわたせば、遠とほきは水天すいてん一髮横いっはつよこに際涯さいがひなし、南みなみに廻まはりては松川浦まつかはうらの全景ぜんけいは煙嶼えんしよく點々てんてんとして眼底がんていに集あつま、此この浦うらの十六勝じゅうろくしやう一として掌中しやうちゆうにわらざるなし、謂いふに、此この浦うらを圍かこめる處ところは東岸とうがんを除のぞきては三面めんの列障宛れつしやうあながらこの灣わんを掩おほへる籬まがきの如ごとく、灣内わんないの島嶼しやうしよくは浮島うきしまのそれの如ごとし、文字もじケ島しま沖おきケ島しまなぞ小橋こはしを細ほそく渡わたして、往ゆき來きすべく設もちけ

られたる、島のわなたこなた苦背くせいの屋根やうちの上うへより薄うすき煙けいりの立ちのぼる、鹽田しほだの格子形かうしがたに造つくられたる其そのの繪模えも様よう、たゞ夫それ東岸とうがんの汀洲ていしゆう一條いちじやう、松沼まつぬまケ濱はまより一步いっぽ轉てんすれば洪濤こうたう怒浪どらうと共に海底かいていに沈しつむべし飛鳥あまかみ湊みなとは汀洲ていしゆうの盡つくるところにして、海水かすゐまた深ふかく浸ひたせり、此この湊みなとに連つらりて今いまわが立たてる處ところを水莖すゐけい山さんと稱しょうして、其一角そのかくを鵜尾崎ういさきとは云いふなり、其風そのかぜ光くわうげに言いはんかたなし其そのの南方みなんぽう遠とほく濛々乎もうくくことして辨せんすべからざる處ところに原はらの町海岸まちかひんを指點してんすべく、浦うらを隔へて、南みなみより西にしに奔わしりては實じつに是こゝれ阿武隈あぶくま一帯いちたいの山脈さんみやく環わん匝さつ連れん亘ごんし、或あるは近ちかく、或あるは遠とほく、或あるは淡たん煙えんの如ごとく、或あるは青螺せいらの如ごとし、顧かへりみて北方海面ほくぱうかいめん脚下かたの斷崖だんがいを俯視ふしす、潮音雷しやうおんらいの如ごとく、巨巖きよがんに碎くだけ、躍おどりて玉霰ぎよくせんを散さんずるが如ごとく、寄よせては返かへす波打際なみをぎ遠とほくは澎湃まうはいの奇觀きくわんを呈ていして、瞬時しんじにしてわれは其その

の雄大、崇高の奇觀に驚眩せられ了りぬ、其の崖に伏し生ふる女松男松、翠蓋幾條、百丈の巖角を縫ふて垂るゝもの、或は巖隙を貫きてあはや其根幹水に落ちんとして落ちざるもの、其の間に凸凹せる亂石奇巖殆んど名狀すべからざるものあり、かゝる危き崖際に沿ふて咲き亂れたる草花の名も知れぬが多かるなかに、優にやさしくも咲き出でたるは一朶の鹿の子百合のそれなりき、かすかに猿臂を延ばして、摘み取りしに、花莖はいともみづ／＼しく、白きは愈々白く、香ひは愈々高し

嗚呼この一輪の百合の花よ、われは其の可愛き姿に心動きぬ、野草幾種、林木幾類、自然の賜は滌なす斗りなるに、何とてこの百合の花のみ、この崖際に咲けるなるかと鋭き感じは與へられぬそは何故ぞやわれはこれを女性の一面に考へ及ぼし

ぬ、かの女性の世の辛苦と艱難の柵に纏はれつゝ、つれなき生涯を経て、寄る邊なき身となり果つるも、一片の情操をいさゝかの追憶の躰に委せて、辛き世ながらに、堅き真心の力をたよりつ、一生を優にやさしき間に送る、この花それにも似たらすや、白き花冠をこの海甸に巖頭に翳して、颯風幾夜吹き荒む中に凜たる佳香を放つ、烈女貞婦のそれにも似ずやなぞと、心竊かに思ひ出されしが既に去りし二友に呼ばれて、ひた走りに走りて、もと來し夕顔觀音の石段を降り、小店に寄りて、林檎購ひ求め帽子を臨時のバスケットとはしつらひつ舟に歸り、舟越觀音より、裏濱傳ひに進みゆけば、はや原釜の浦邊にと出でぬ、暮色海灣を包みて、山容また消ゆるに似たり、只響く潮聲の去來、脚下に其の呻りを高ふするあるのみ。